

氏 名	畑 山 敏 夫
学 位 の 種 類	博 士 (法 学)
学 位 記 番 号	第 5098 号
学位授与年月日	平成 19 年 12 月 27 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項
学 位 論 文 名	現代フランスの新しい右翼—ルペンの見果てぬ夢
論文審査委員	主 査 教 授 野 田 昌 吾      副 査 教 授 永 井 史 男 副 査 准教授 宇羽野 明 子

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、1980年代以降のヨーロッパ各国におけるいわゆる「極右」勢力の急速な伸張という現象をどのように理解するかという問題について、そうした政治勢力の中でもっとも成功したと言ってもよいフランスの国民戦線（FN）の分析をもとに考察したものである。畑山氏は、これらのいわゆる「極右」勢力が、きわめて現代的な社会的背景をもち、また伝統的な極右勢力とは異なる性格をもっているという意味で、ファシズムとは区別される「新しい右翼」という規定をこれに与えているが、本論文は全体として、FNを素材として、そうした規定の妥当性を様々な角度から確認するという構成をとっている。

まず第 1 章では、FNの成立期から90年代末までの足跡について簡潔に確認されている。それによると、FNの歴史は、①「古い極右」からの脱却期、②移民問題を取り上げる権威主義的かつ新自由主義的な「異議申し立て政党」として成功する時期、③新自由主義的主張を後退させ、グローバル化に対する民衆的利益の擁護者として自らを打ち出す「ナショナル・ポピュリズム」路線の時期、の 3 つの時期に区別できる。選挙への参加に重点を置き、議会制民主主義体制に「適応」を図るとともに、反移民的主張と徹底した既成政治勢力批判によって他の政治勢力からの「区別化」を図る戦略により、FNは、80年代中葉に旧中間層の保守支持層の不満を吸収するかたちでフランスの政治地図に地歩を固めていくが、その後、90年代に入る頃から、労働者や失業者など勤労的大衆層の支持の比重が増していく。その背景には、欧州統合とグローバル化の進展を背景とする民衆的有権者の不安と既成政治への不満が存在するわけであるが、これに対応する形でFNは新自由主義的主張を後退させ、「自国民優先」の福祉やグローバル化に対抗する保護主義的な主張を前面に出す路線の転換を行ない、今日的不安に対する独特の処方箋を提示する勢力として独自の地位を占めることに成功する。第 2 章では、選挙データなどを用いて、この支持層の「プロレタリア化」の分析が行なわれ、また第 3 章では、FNのこうした成功を支えた主体的努力、すなわち組織とイデオロギーの両面の整備について、そして第 4 章では、90年代に入っの路線転換の内容とその過程がそれぞれ詳細に考察される。

このように、有利な社会経済的条件と主体的努力とによって順調に躍進を続けてきたFNであったが、90年代末、党分裂という大きな危機に見舞われる。第5章はこの分裂過程を分析する。本章は、この分裂劇が、FNの躍進をこれまで支えてきた組織的整備の結果として生じた党の脱ルペン化によるものであるとともに、他方で成功したがゆえに問われることになった党の今後の針路をめぐる路線対立の産物であったことを明らかにしている。この分裂によりFNは勢力を後退させ、FNの歴史も終焉に向かうかとも見られたが、2002年大統領選挙で決選投票に進出するという躍進を遂げる。この2002年大統領選挙に焦点を当て、2002年以降のFNについて分析する第 6 章は、90年代に築かれた組織とイデオロギーの基盤が、FNの危機からの脱却を可能にしたと論じている。なかでもイデオロギーの点では、アメリカ主導のグローバル化に対抗して国民国家の復活と国家による国民利益の擁護を唱える「右からの反グローバリズム」の主張が、民衆的有権者を惹きつけるうえで威力を発揮した

が、第7章は、FNのこの反グローバリズムを考察する。

以上の考察をもとに、第8章では、ヨーロッパでの「新しい右翼」現象をどのようなものとして理解すべきかという問題について、一つの解釈が提示される。すなわち、「新しい右翼」は、グローバル化とポスト産業化の進行により大きな揺らぎの中にある近代的な社会経済秩序や近代的価値を防衛しようとする、ポスト近代社会に現れた近代擁護運動、「脱近代的近代主義」の運動であり、その意味で、すぐれて現代的な政治現象である、とされる。畑山氏によれば、脱近代化による不安を強く感じている旧中間層や民衆的社会層が「新しい右翼」を支持するのは、「新しい右翼」が、グローバル化をさらに推し進める方向でも、これとは逆に成長優先主義を批判する脱物質主義的でリバタリアン的な方向でもない、近代的秩序の擁護・再確立という、他の政治勢力とは異なる独自の方向を打ち出しているからにほかならない。そうした解釈をもとに、終章では、持続的成功に必要な党の制度化には困難があることを指摘したうえではあるが、脱近代化に伴う不安や危機に政治が対応能力を発揮できない状況が続く限り、「新しい右翼」は有権者の一部を惹き付ける存在として先進社会に徘徊し続けるだろうと述べられ、本論文は閉じられている。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、畑山氏にとって、フランス国民戦線（FN）とヨーロッパにおける「新しい右翼」に関する2冊目の単著であるが、前著『フランス極右の新展開——ナショナル・ポピュリズムと新右翼』（国際書院、1997年）同様、わが国におけるFNおよびヨーロッパ新右翼に関する理解を大きく前進させる優れた研究として、高い評価に値する研究である。

すでに前著において畑山氏は、これまで戦前のファシズムのイメージで捉えられがちであったヨーロッパの近年の「極右政党」について、FNのイデオロギー、組織、支持基盤、政治スタイルなどについての綿密な実証分析により、FNを代表とする近年の新しい右翼政党が、そうしたファシズム・イメージではもはや捉えることの出来ない存在であるとともに、そうした新しい右翼政党の特質はヨーロッパ政治経済の構造変容と密接に関わるものであることを説得的に示し、わが国のこの問題に関する研究水準を大きく引き上げたが、今回提出された学位申請論文においても、畑山氏は、前著で踏み込んで分析できなかった90年代以降のFNをめぐる動きについて、前著同様の綿密な実証分析を行ない、前著で提示したヨーロッパ新右翼理解の妥当性を確認したうえで、FNをはじめとする「新しい右翼」政党にこの間生じている変化に関する豊富な情報を整理し、これに分析を加えることで、ヨーロッパ新右翼研究の水準をまた一段高めている。

とくに、90年代以降に進行するFN支持層の「プロレタリア化」とこれに対応する「福祉ショーヴィニズム」の方向への同党の路線転換の動向についての詳細な紹介と分析、そしてそれを踏まえてのFNの「脱近代的近代主義」としての性格規定は、いわゆる「極右政党」研究にとどまらず、比較政治研究一般にとっても貴重であり、本論文の存在意義を大きく高めている。90年代末までは一般にヨーロッパ新右翼は、政治的対抗軸の変容に関するH・キッチェルトのモデルを下敷きとして、市場原理主義的で権威主義的である「右翼権威主義」として性格規定されてきたが、本論文が示すように、90年代に入りヨーロッパ各国の「新しい右翼」は「プロレタリア化」を経験し、また、「自国民優先」の「福祉ショーヴィニズム」の主張を展開するようになってきており、キッチェルトの分析枠組みとともども「新しい右翼」の性格規定が改めて問題にされている状況にある。こうしたなかでの本論文におけるFNおよび新右翼の「脱近代的近代主義」という規定は、政治史研究者としての畑山氏のバックグラウンドが活かされた規定であるが、〈分配—市場〉軸と〈リバタリアン—権威主義〉軸とから新右翼の性格規定を行なおうとするキッチェルト、あるいは文化的対立軸を前面に出し、脱物質主義革命に対する右からの「対抗革命」としてこれを理解するイニャーチの規定がそれぞれもっている難点を同時に克服する可能性を持ったものとして注目に値する。

もちろん本論文で十分に論じつくされなかった問題点もいくつか存在する。本論文の中心的主張である「脱

近代的近代主義」という規定に関わって言えば、新自由主義的主張が後景に退いたのは戦術なのかどうか、すなわち転換なのか修正なのか、あるいは、こうした〈分配—市場〉軸はFNあるいは新右翼のイデオロギーにおいてどのような位置をそもそも占めているものなのか、80年代のFNをも「脱近代的近代主義」の範疇で捉えることができるのか、などである。しかし、FNあるいはヨーロッパ新右翼の理解をさらに深めるうえで意味を持つこうした疑問点を浮かび上がらせたこと自体、本論文の功績であると評価することができ、FNならびにヨーロッパ新右翼に関する研究に果たす本書の貢献をいささかも損なうものではない。

以上述べた理由から、本論文は、FNとヨーロッパ新右翼に関する優れた研究論文として、わが国の政治学界へ寄与するところ少なくないものがあることから、本審査委員会は、大阪市立大学博士（法学）の学位授与に値する業績であると判定する。